

坂本 要著

『民間念仏信仰の研究』

吉村 旭輝

はじめに―本書の構成と民間念仏

著者は本書の冒頭で「民間念仏とは、民間人・在家の人が中心になつて行ふ念仏で、何々念仏という名称で、念仏芸能や念仏講として全国で広く行われている。これらの念仏はここ半世紀の間に、だいたい行われなくなったが、歴史的には融通念仏・大念仏・六斎念仏・双盤念仏・念仏踊りとして、さまざまに展開し、現在に至っている。」と述べている。

「民間念仏」という言葉は、昭和四十一年（一九六六）に刊行された『民間念仏信仰の研究 資料編』としてはじめて全国規模の「民間念仏」が網羅されるのだが、その書を「資料編」として念頭に置き、著者自身の民俗調査の蓄積によって構成し、論考を加えた「続編」と位置づけ、その上で民間念仏信仰研究の基盤となるべく執筆したのが本書と位置づけている。

著者は半世紀にわたり全国約六〇〇カ所において民俗調査を実施し、「民間念仏」の実態に基づいた歴史的経緯を追った論考を展開し、同研究の再構築を試みている。その上で、唱導を主体とした融通念仏・六斎念仏・双盤念仏と、踊りをともなう風流系念仏踊りの二つにわけて章立てを設けている。まずはその章立てを挙げておく。

第一章 民間念仏の系譜

第一節 民間念仏の系譜

第二節 踊り念仏の種々相

第二章 融通念仏と講仏教

第一節 融通念仏と大念仏

第二節 知多半島の虫供養大念仏と講仏教

第三章 六斎念仏の地方伝播

第一節 全国の六斎念仏

第二節 奈良県の六斎念仏

第三節 若狭の六斎と念仏

第四節 平戸・杵岐の六斎念仏

第五節 富士山周辺の祈禱六斎念仏

第四章 双盤念仏―芸能化された声明

第一節 双盤念仏の概要

第二節 神奈川県の双盤念仏（付・千葉県）

第三節 東京都の双盤念仏

第四節 埼玉県の双盤念仏

第五節 関西の双盤念仏

第六節 善光寺と名越派の双盤念仏

第七節 双盤念仏の成立と変遷

第八節 双盤念仏資料

第五章 大念仏と風流踊り―念仏踊りの二部構成

第一節 三遠信国境地区と周辺の大念仏芸能の概観

第二節 南信州の念仏踊り・掛け踊り

第三節 水窪大念仏と五方念仏

第四節 三遠信大念仏の構成と所作―三河地区を中心に

第五節 奈良県十津川村の大踊りから見た盆風流

第六章 傘ブクと吊り下げ物

第一節 伊勢・志摩大念仏と傘ブク

第二節 傘ブクと送魂儀礼

このように、第一章では総論として「民間念

仏」の時代的変遷を追いつながら「民間念仏」のそれぞれの系譜を概説。第二章から第四章までは著者が分類した唱導系の「民間念仏」にあたる融通念仏・六斎念仏・双盤念仏をそれぞれの章で分析およびその分析に基づいた事例の報告がなされる。第五章では風流系念仏踊りにあたる大念仏と風流踊りについての分析に基づいた事例の報告を行なう。第六章では、死者の遺品が吊り下げられた伊勢・志摩地方の大念仏での「傘ブク」を取り上げ、その起源となつた祇園祭の傘鉾との関連から分析を行なう。

ここではこれらの章立てに添いつながら本書の成果の紹介を中心に新たに見つかった課題もあわせて紹介する。

まず第一章では唱導を主体とした融通念仏・六斎念仏・双盤念仏と、踊りをともなう風流系念仏踊りの二系統の紹介と概説を行なっている。とくに冒頭での念仏の紹介および「民間念仏」の定義では、五来重が論じた空也―良忍―一遍の念仏を「まったく異質な念仏であつて、非理性的・呪術的・集団的な性格をもつて」いることに準拠し、「日本固有の精神構造・宗教観念が空也・良忍・一遍の念仏を生み出す」とする考えが基盤となつている。その理念上で想定された「民俗的念仏」の歴史の変遷を論じることが本書での主題となっている。本章の概説ではこの「民間念仏」の定義のもと、それぞれの歴史の変遷の概略を百万遍念仏、六斎念仏、双盤念仏、念仏踊り、傘ブクと盆踊りにわけて解説している。それらのほとんどが大念仏と称される融通念仏を中心に展開していくことを前提とし、融通念仏は戦国時代以降の惣村成立、信仰の高まりから持斎運動に展開して生まれた六斎念仏、近世初頭の爆発的流行によつて広

まった風流踊りとの結合による踊り念仏の誕生など、それぞれが誕生した経緯を述べている。その上で、第二節では「踊り念仏の種々相」として宗教性が強い踊り念仏と芸能化された念仏踊りに分類し、それらをそれぞれ空也派、融通念仏、一向、一遍、時宗と時宗、京都六斎念仏の六系統の踊り念仏、そして風流踊り系、小念仏とおしやらく、天道念仏、ジャンガラ念仏の四系統の念仏踊りにわけて、とくに踊り念仏を中心に空也と導御の踊り念仏の有無、また一向、一遍の踊りを鎌倉時代の文永から弘安にかけて史料上で通観している。そのなかで踊り念仏の担い手たちの遊行という鎌倉末期から南北朝期の特徴であり、その後一向の踊りは二代礼阿智によって、また一遍の踊りは時宗主流派である藤沢遊行派によってそれぞれ法式化・儀礼化されていくまでを概観している。

融通念仏・六斎念仏・双盤念仏

著者の論考の中心となるのが第二章以降の各論にあたる。第二章では融通念仏と講仏教について論じられている。まず融通念仏による念仏の唱導が大人数となり、大念仏となる定義を呈し、江戸時代初期の檀家制度のよって成立する村落仏教以前の形態である講仏教としての大念仏を知多半島の念仏行事を中心に論じている。知多半島の場合、虫供養大念仏として行なわれている。ここでは五来が断片的に紹介し、鈴木泰山⁴のみの先行研究しかなかった知多半島内の一地区を調査し、その報告と縁起・史料・行事・念仏儀礼・念仏信仰史の観点で考察している。そのなかでは江戸時代以前の宗派別の統制がなされる前に基本形があり、そこに天台宗真盛派、曹洞宗そして浄土真宗高田派によって融通念仏、百万遍念仏、四遍

念仏の影響を取り入れ、現在の虫供養大念仏の形態となった背景を論じている。また大野谷地区に残る民間念仏者が担う巡回念仏である「阿弥陀はんさん」に注目し、「初期の真宗高田派や中世融通念仏集団の形態に通ずるもの」として近世初頭の民間念仏信仰の形態をよく残したものと論じている。

また第三章では「六斎念仏の地方伝播」と題し、高野山麓を中心に近畿地方に数多く残る六斎念仏に注目し、第一節では六斎念仏が行なわれる地域の紹介、第二節では融通念仏宗や浄土宗の村落で曲種や太鼓が混入した形態になる奈良県の事例、また第三節では若狭街道の系統と名田庄から京都に至る街道筋の系統で大きく念仏的（引声系）と芸能的なものに分かれる若狭、第四節では江戸時代初期に平戸藩のキリシタン排斥の意向に沿って広められた長崎県平戸市と五島列島、彦岐の事例、そして九字・五方堅め・神寄せといった儀礼や刀を使った病氣平癒の祓い、また墓目などの儀礼がつく祈禱六斎念仏が残る富士山周辺の事例をそれぞれとりあげている。これらの事例はそれぞれ特徴をもっており、一定の原型をもつ念仏に宗派の関与や、富士山周辺の場合は修験や富士行者などの関与によってそれぞれの地域独特の六斎念仏が形成されていったことを論じている。

そして第四章では尺鉦や尺三と呼ばれる鉦を叩きながら念仏を唱える双盤念仏をとりあげ、双盤鉦が引声念仏に登場した江戸時代初期から浄土宗の儀礼として成立した背景をもとに第一節ではその概要を述べている。第二節から第四節では鎌倉光明寺の双盤念仏がもとなった神奈川県、東京都、埼玉県の事例をそれぞれとりあげ、神奈川県での双盤鉦のみになる事例、また明治・大正時代

に東京都や埼玉県で双盤念仏が流行し、拠点の寺堂ごとに流派が成立していったようすを紹介し、形態や鉦の年号、史料を中心に分析している。また第五節では近畿地方の事例であり、滋賀県安土浄厳院に端を発し、かつては安土以南の滋賀県内の約三百カ寺で行なわれていた雲版太鼓と双盤鉦を用いる楷定念仏とその他の地区にわかれることを述べ、それぞれの事例紹介を行なっている。そして第六節では「きざみ叩き」「雨だれ」と呼ばれる叩き方に特色のある善光寺系寺院と、施餓鬼の儀礼が発達した福島県いわき市を拠点に東北から北海道に分布する名越派を中心に紹介する。その上で双盤念仏の成立と変遷を述べたのが第七節である。そこでは各地の分布の拠点となった京都真如堂や鎌倉光明寺の十夜法要での「引声」に注目し、それらの歴史的背景や変遷に迫っている。

また次項以降は双盤鉦と念仏の分析である。入退堂での雲版念仏や三遍返し「引声」「六字詰め」の回向鉦など、鉦の使用の用途や叩き方、そしてそれらが役僧の代役として僧侶から在家で行なわれるようになった事例から関西での双盤鉦のみの地念仏への変化、関東では江戸時代末期から明治・大正時代にかけて流行し、遊び鉦として各流派を生んでいく背景を論じている。最後の第八節では全国の双盤念仏、双盤・雲版の古鉦、そして双盤念仏・雲版の構成の一覧表があり、著者の細密な調査データを一覧することができる。

風流踊り系念仏踊り

第五章では、著者が踊りをもとなう風流系念仏踊りとして「民間念仏」のもうひとつの系統について、引声で唱える大念仏と融通念仏が踊りとは別に唱えられる系統を分析している。第一節では

天竜川中流域にあたる引声系の念仏や和讃を唱える部分と「ハネコミ」と呼ばれる風流系太鼓踊りの輪踊りが交互に行なわれている三遠信国境地区の諸相をとりあげ、融通念仏である大念仏をもとに風流踊りや傘ブク・修験道の儀礼が加わって成立した東海地方の大念仏について分析している。そのなかでも第二節では南信州の大念仏・念仏踊りをとりあげている。ここでは東海地方と芸能や芸能の構成が一致しているが、念仏を唱えない掛け踊りや樽木踊りという踊りが存在している。それらを紹介し、一般的には南信州は明治維新の廃仏毀釈によって神道色を強くした地域であるため、念仏を唱えないようになったと考えられる。そのなかで、著者は村内の神仏に巡拝して願掛けを行なう儀礼に注目し、その行列に風流系の作り物や踊りが入ったと分析をしている。次に第三節では静岡県水窪町で盆の一日日に新亡の霊のために行なわれる水窪大念仏と、そのなかで、新盆の家々の庭の祓いなどで行なわれる五方念仏をとりあげている。このなかでは五方念仏や神名帳の唱えなどが行なわれており、陰陽道・修験道の儀礼との関連を示唆している。そして第四節では三河地区を中心に三遠信全域の大念仏の構成と所作をまとめ、引声系の念仏では踊りがなく、また「ハネコミ」という輪踊りが共通して存在していることを調査結果から明らかにしている。またつづく第五節では奈良県十津川村に残る大踊りと三遠信大念仏を比較し、三遠信での「念仏・ハネコミ・送り」と十津川村の「踊り歌(列の向き合い太鼓)・セメの輪踊り、速いセメの輪踊り」の構成が一致していることから十津川村で横並びの列からセメの輪踊りに移行する際に三遠信のような念仏が入っていたことを示唆している。

傘ブクと吊り下げ物

第六章では三重県の志摩半島一帯で行なわれている大念仏に出される「傘ブク」を取り上げている。この大念仏では鉦打ち太鼓を叩きながら「ナムアミダブツ」を唱える「ガク打ち」、新盆の人の戒名を掲げて供養する「名乗り」、その後道行の遺品を吊り下げる傘ブクが出され、その後道行きや輪になって練る構成となっている。地域によってはカンコ踊りのみの場合もある。第一節ではこの志摩半島の大念仏を紹介し、その構成の特徴をまとめていく。そして第二節では京都祇園祭に出る傘鉦など祭礼で使用される風流傘との関係論じていく。とくに「傘ブク」が傘鉦の訛ったものと想定し、吊り下げ物を下げた点、京都のやさしい花で疫病除けとして傘鉦のなかに入る事例などを挙げ、祭礼に出ていた傘鉦が盆行事や小正月行事の風流化にともない、作り物風流のひととして登場するようになったと論じている。そのなかでは盆と小正月になぜ傘ブクが登場するのかをそれらの行事の特色である農耕儀礼的要素、祖霊祭的要素太陽や歳の再生という側面と結びつけ、「祖霊や神の去来」を想定している。また出光美術館蔵の「祇園祭礼図屏風」に描かれた祇園祭での傘鉦の吊り下げ物を比較し、祇園祭の疫病除けにあやかっ、見物人として参加する際に傘に身につけていた物を吊り下げる「身祓い」の事例を取り上げて、その延長線上に志摩半島の大念仏での傘ブクを想定し、同祭礼の起源となった祇園祭の傘鉦との関連から分析を行なっている。この分析は今後の祭礼研究にも影響を与えられと考えられる。

おわりに

著者は「あとがき」のなかで「資料集として扱うべきか論集として扱うべきか迷いました。」と述べている。その理由は「論としての展開や確証の詰めが甘い感はありません。現状調査から入って歴史を遡る方法の限界ともいえます」としている。実際に本書調査範囲が全国での広範囲におよび、本書の刊行までに約五〇年の調査を費やしている。内容的には著者が述べたように論としては甘い部分もあるが、この膨大な調査資料を整理し、まとめられたことには敬意を表したい。著者が本書で示した問題提起をもとに同研究がさまざまな地域に住む研究者に波及し、さらなる調査によって解明する糸口となることが考えられる一書といえよう。

注

- 1 佛教学民間念仏研究会編(一九六六)『民間念仏信仰の研究 資料編』隆文館
- 2 五来重(一九五七)『民俗的念仏の系譜』『印度学仏教学研究』五一(通巻一〇)(五来重(二〇〇八)『五来重著作集』七・民間芸能史、法蔵館所収)
- 3 五来重(一九五七)『融通念仏・大念仏および六斎念仏』『大谷大学研究年報』一〇、大谷学会
- 4 鈴木泰山(一九六三)『尾州知多郡阿久比谷の虫供養について』『愛知大学総合郷土研究所紀要』九

(法蔵館 二〇一九年一〇月刊)

続かなかった。

(二〇二〇年二月例会)

彙報

例会記録

一月十日(金)

狩野派と能狂言絵

於 ハートピア京都

藤岡 道子氏

二月八日(金)

江戸時代前期の役者評判記と雛形本

於 ハートピア京都

廣瀬千紗子氏

三月八日(金)

開催中止

新入会員名簿

加藤いつみ氏

〒五〇七―〇八三一

岐阜県多治見市新町一―六三一―

編集後記

今年二月までは順調であった例会が、本号の初校が開始した頃から怪しくなった。コロナウィルスである。結局三月の例会は休会となり、四月以降や、六月の大会も延期せざるを得ない状態に立ち入っている。早い収束を祈るばかりである。
人と人とが顔を付き合わせる会合や議論はもとより、芸能公演などが自粛させられたわけだが、現在

は、旧来の方法とは違って、多様な機械媒体が発達しており、多くの代替え手法があることに改めて気が付かされた。例えば「芸能」の場合、生の人間が観客と共に、同じ空気を共有して心をときめかすという旧来の方法とは別に、いつの間にか、一方面的ではあるが、個人の耳目に届けられる芸能表現が、夥しく発達していったのである。

今回は論文二本とノート一本である。樋口氏は「史料年表稿」という形態を取るが、豊後大友氏を例に領国下に置ける猿楽能の実態を丹念に搜索した論文である。編集者個人としては、各地域の領国大名下の芸能史料を明らかにされることを切に望むが、史料と資料を混在させた芸能史ではなく、それを峻別した所に筆者の工夫がある。

山田氏は既に大著を出版されているが、昨年度の大会でされた実演付きの講演を軸に成稿して頂いた。加納氏も大著『日本操り人形史』を完成されているが、操り人形頭(かしら)の時代判別の要点を解りやすく纏めてくださっている。(K・Y)

二〇二〇年四月十五日印刷 一、八〇〇円
二〇二〇年四月二十日発行

芸能史研究 第二十九号

発行所 藝能史研究会

〒602-0855 京都市上京区河原町荒神口下ル

上生洲町三三キトウビル三〇三号室

電話FAX〇七五二五―一三三七

振替〇一〇二〇一〇一五八七

印刷所 協和印刷株式会社

〒615-0052 京都市右京区西院清水町一三

電話〇七五三二二一四〇一〇